

震しき夢



宇津木麗華

題字は自筆

一年で最も寒いとされるこの時季になると、決まって優しい笑顔が目につく。尊敬する宇津木妙子さんの母で、私も「お母さん」と呼んでいた恵美子さんとの別れが「大寒」と重なったからだ。今から20年前の2001年1月、天に召された。享年78。「しつかり！」が口癖だった。

中国出身の私は1988年春、24歳のときに来日した。妙子さんが指揮を執る日立高崎（現ビックカメラ

高崎）に加入。最初の4年間、高崎玉にある妙子さんの自宅に下宿し、寝食をとも

早朝5時には朝食を取れるように準備してくれた。キュウリとミョウガを入れ、ごまだれでいただく冷やしうどんは絶品だった。日本であれ以上の美味に出合ったことがない。食が細くカレーライスと中華料理しか口にできなかった私が

早くして母を亡くし、異国で暮らす身には家族のぬくもりを実感するかけがえのない時間でもあった。20年前、お母さんの誕生日の次の日に、私はバースデーの「おめでどうコール」を入れた。日取りも決まっていた妙子さんの結婚披露

宴の話で1時間ほど盛り上がった。娘が嫁ぐことになり、幸せに満ちた声だった。翌日、妙子さんから泣きながら訃報を聞かされたとき、信じられなかった。あんなに元気だったのに一瞬にして魂がなくなるなん

て、信じたくなかった。私との電話の後に突然、体調を崩したという。結果的に私がお母さんと最後に会話をしたことになった。実の母が亡くなったときは17歳。自身の性格についてよく分かっていたいなかった。お母さんのときは37歳。「一日一日を悔いなく生きよう」と誓ったのを覚えてる。頭と体：自分の能力を使い、出し切って生きていくんだ、と。若い選手との会話でも「もっと親を大切にしなさい」と諭すようになった。その後、2004年には父が他界。私には「日本の親」に加えて、両親もいなくなった。自分にとって「甘えさせてくれる場所」がなく、本当の意味で「大人」にならなければと思うようになった。決断力も早くなった。誰に何を言われても揺るがず、己の思い通りにやるのが一つの行動指針になった。お母さんは私の一番の応援だったかもしれない。東京五輪まで半年を切った。コロナ禍で開催の是非が取り沙汰される中、私たちは毎日悔いなく生きることにできない。天国からの「しつかり！」の声になさずしてみる。恥ずかしいけどキスの嵐が懐かしい。（ソフトボール女子日本代表監督）

「お母さん」のキス

随時掲載